

表現体験をとおして文化理解を深める鑑賞教育の教材開発

美術科 高地 秀明

世界がグローバル化する今日、自分たちと異なる文化への理解を深めることがますます重要になり、美術教育においても鑑賞は大きな柱の一つとなっている。本研究では、美術作品の表現意図や地歴的な背景探究と表現体験を交えた鑑賞教材を開発し、授業実践をとおしてその有効性を検証した。開発した教材は、西洋と日本の美術の中から、幾つかの特徴的な文化事象をテーマとして取り上げ、その作品の背景を探るとともに、実際にその様式や手法を用いて作品制作を行うことをとおしてその文化に迫ろうとするものである。高校1年生で授業実践を行った結果、多面的な視点からの文化理解が進み、鑑賞教育の一つの試みとしての有効性が確認できたと考える。

1. はじめに

近年、美術教育において鑑賞教育の重要性が指摘され、多様な実践が行われている。しかし、中学校・高等学校の新しい教育課程において美術（芸術）の授業時間数が少なくなり、表現や鑑賞に多くの内容を盛り込むことが困難になっている。そうした限られた時間の中で鑑賞教育を如何に有意義な内容に構成するのかが重要な課題であると考えられる。

鑑賞教育のあり方については様々な論議がある。一つは、作家の生き方や美術史的知識をもつての鑑賞を重要視する意見である。つまり、表現者をまず理解することにポイントを置いているのである。もう一つは、表現者の意図や美術史等の知識などに縛られることなく、鑑賞者が自由に能動的態度で鑑賞すればよいという主張である。これは鑑賞者が主体となる鑑賞を大切にしようというものである。

これらの論議には小・中・高の12ヶ年という長いスパンの学校教育における生徒の発達年齢を考慮した適切な鑑賞学習教材の提供、鑑賞教育のあり方、という視点が欠落しているものもある。筆者は次のように考える。

第1点の「鑑賞者が主体となる鑑賞」は、作品と対話しながら自由に能動的な鑑賞のあり方として、生涯学習からの見地からも最も重要なことである。しかし、これをそのまま学校教育に導入した結果、単なる表面的な観察や、独り善がりな解釈、好き嫌いという感覚的な結論に終わることが危惧される。

第2点の「表現者の意図を理解する鑑賞」は、作家の生き方や歴史的な背景から美術作品に迫ろうとするものである。これは美術作品をとおして、文化理解や人間理

解を深めるという大きな意義がある。しかし、このことのみが強調される鑑賞学習では、あるべき鑑賞の仕方や作品の見方を定義してしまい、鑑賞者の主体性を阻害することに繋がりがかねない。

前述の二つの考え方は、どちらも鑑賞において必要な態度であり大切な視点である。したがって、両者をうまく融合し、生徒の発達年齢を考慮した適切な教材の配置・構成を検討することが重要であると考えられる。例えば、ある時は、作品を子ども達の目で自由に観察し、様々なことを発見させて味わわせることにねらいを置き、また一方では、作家研究などとおして美術作品の背景を探り、文化理解を深めるといった授業が効果的に構成されることが望ましいと考える。

本実践研究では、鑑賞教育の一つのあり方として、高等学校1年生を対象に、文化理解を深めるための表現体験と鑑賞学習とを一体化した教材を開発し、授業実践をとおして鑑賞授業の教育効果を考察しようとするものである。

2. 教材開発と授業実践

(1) ねらい

次のように鑑賞教育のねらいを設定し、教材開発と授業研究に取り組んだ。

- ①表現体験と鑑賞をとおして多様な美術作品の良さや美しさを感じ取らせる。
- ②表現体験と鑑賞をとおして表現の意味を理解させ、文化理解、人間理解を深める。

造形芸術の様々な事象を捉えようとするとき、単に感覚的に観るのでは、それを理解したことにはならない。

「表現の意味を理解する」とは作家の表現意図や作品のよさや美しさなどの価値を感じ取ることである。

また、作家の生き様、その歴史・地域的、文化的な背景などに迫ることによって、作品を多面的な視点から分析的に捉えることを重要視している。

(2) 題材設定の理由

本題材は、西洋および日本の特徴的な視覚表現を幾つか取り上げ、「鑑賞・考察」と「体験（表現）」を一体化した学びをとおして、視覚表現におけるものの見方・捉え方・表し方について分析的に考察し、鑑賞を深める内容である。

① 鑑賞・考察

人間は自然や社会の事象を見つめ、造形表現において実に多様なものの見方とらえ方、表し方を試みてきた。

作品鑑賞をとおして、人間（作家）は何をどのように見つめ、捉え、表現しようとしたのかを探究・考察する。そして、造形表現の背景となっている世界観、人間観等についても考える。

また、造形作品の形や色、素材などの造形要素（造形言語）の仕組みについて分析し、作品のよさや美しさを感じ取る。

② 表現体験

造形作品の特徴的な視覚表現について、その様式や手法を実際に体験することによって、表現の意味に迫る。

(3) 指導上の工夫

導入時にスライドやOHCによる作品鑑賞を解説を交えながら時間をかけて行うことによって、学習への興味関心を抱かせる。この際、いわゆる通史的に作品を見ていくのではなく、文化理解の手がかりとなるように多様で多面的な切り口で文化事象を扱う。例えば、人物をテーマとした作品であれば、ルネッサンスのミケランジェロと鎌倉時代の源頼朝像、ピカソのキュビズムの作品を並列的に提示する。これらは人間を描いたという共通点はあるものの、時代も地域も異なり、ものの見方やとらえ方が決定的に異質である。それぞれの文化の特質についての発見や疑問「人間は何を見つめ、どのように表現しようとしたのか」がこの学習の動機となるのである。

また、この学習活動では、鑑賞や考察だけでなくその文化の手法を体験することで文化の背景に迫ることもねらいの一つである。レオナルドのパースペクティブの手法でスケッチを試みたり、東洋の中世の俯瞰的で並列的な図式表現で描くことや、20世紀ピカソのキュビズムの概念を体験することでその時代の世界観や人間観について思い考えることができる。

(4) 授業の構成

この鑑賞学習の対象は高等学校1年生で、5回の授業、計10時間で構成されている。1回の授業は2時間連続である。授業展開は2時間連続の内1時間は鑑賞・考察、1時間は表現体験の授業である。

取り上げる鑑賞の対象となる造形作品は次のとおりである。

- ・テーマ1：ルネッサンス絵画
- ・テーマ2：日本の中世絵画「源氏物語絵巻」
- ・テーマ3：キュビズムと20世紀美術
- ・テーマ4：水墨画の世界と日本美術
- ・テーマ5：抽象絵画の世界

(5) 授業展開例

① テーマ1「レオナルド・ダ・ヴィンチのまなざし」 ＜学習目標＞

レオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晩餐」やラファエルロ「アテネの学童」などのルネッサンス絵画を取り上げて鑑賞し、パースペクティブに見られるものの見方、とらえ方や世界観などについて考察する。また、表現体験をとおしてパースペクティブによる空間把握の概念を理解する。

＜展開：2時間＞

- I. スライドにより作品を鑑賞しながら、生涯と業績について学ぶ。（主に講義）
- II. 文献やスケッチ・絵画などを調べ、ルネサンス期の人々のものの考え方について理解する。（配付資料や書籍による）
- III. 学んだことや自分なりに考察したことをワークシートに記入する。
- IV. パースペクティブの概念を学び、その手法に基づいて表現体験を行う。（作品制作：B4のワークシートにスケッチする）

＜指導上の留意点＞

この時代に人々が人間中心の思考方法や感情を取り戻し、自然や人間を科学的・合理的に見つめるようになった背景について考察させ、理解させる。また、ルネッサンス絵画とピカソのキュビズムや日本中世の源氏物語絵巻などとも比較させながら、それぞれの視覚表現についての興味関心を持たせる。

実技演習においては当時の人々のものの見方・表し方を追体験させるとともに、自分なりの表現を加味して表現させる。

② テーマ2「絵巻物の世界」

＜学習目標＞

日本中世の源氏物語絵巻に見られる俯瞰・斜線構図の

独特の空間表現形式について理解を深める。

<展開：2時間>

- I. スライドにより作品を鑑賞しながら、空間表現の特徴について理解する。(主に講義)
- II. ルネサンスのパースペクティブと比較しながら考察したことをワークシートに記入する。
- III. 源氏物語の表現手法に基づいて実技演習を行う。(作品制作：B4のワークシートにスケッチする)

<指導上の留意点>

“吹き抜き屋台(柱などの枠だけの構造)”風に表されている空間、手前(近く)にあるものも後(遠く)にあるものも平等に同じ大きさで描かれていること、読者の視点は物語展開に即して自由に移動することなど、絵巻物の様々な場面を紹介し、特徴的な表現を考察させる。

③ テーマ3「視覚の変貌、キュビズムの世界」

<学習目標>

「キュビズム」の表現意図を理解するとともに、ピカソをとおして20世紀の文化事象の特徴を探る。

<展開：2時間>

- I. スライドにより作品を鑑賞しながら、生涯と業績について学ぶ。(主に講義)
- II. ルネサンスのパースペクティブと比較しながら、学んだことや自分なりに考察したことをワークシートに記入する。互いに意見交換を行う。
- III. キュビズムの概念を学び、その手法に基づいて表現体験を行う。題材は卓上の静物とする。(図I参照、作品制作：B5のワークシートにスケッチ)

<指導上の留意点>

キュビズムは新たなものの見方「ものを多視点で観察し、再構成する」によってものの本質に迫るとともに、新たな絵画空間を構築しようとした。この表現意図に迫るためにレオナルド以降の規範となったものの見方表し方である「パースペクティブ」と比較考察させる。

④ テーマ4「水墨画の世界と日本美術」

<学習目標>

雪舟の水墨画、長谷川等伯の障屏画、光琳や宗達の琳派、北斎などの作品の鑑賞と水墨画の表現体験をとおして日本美術の特質を理解する。

<展開：2時間>

- I. スライドにより作品を鑑賞しながら、空間表現の特徴について理解する。(主に講義)
- II. 感想や考察したことをワークシートに記入し、互いに意見交換を行う。
- III. 水墨画の実技演習を行う。題材は美術教室にある静物や身のまわりの風景、模写などとする。

(作品制作：B5のワークシートに描く)

<指導上の留意点>

自然の様式化、様式美、構成美、濃淡と線の表現、余白の美、表現の簡潔さ、精神性の表出といった日本美術の特質について気づかせる。特に表現体験においては、長谷川等伯の「松林図屏風」に見られるように、微妙な墨の濃淡によって奥深い空間を表現していること、松の木のすべてを描かず、あえて余白を残すことによって鑑賞者の心がそこに何かを生み出すといった例を示し、余白の美があることを感じ取らせる。

⑤ テーマ5「抽象絵画の世界」

<学習目標>

カンディンスキー、モンドリアン、クレーの作品鑑賞をとおして、20世紀において抽象絵画がどのように誕生したのかを理解し、その表現の意味を考察する。

<展開：2時間>

- I. スライドにより作品を鑑賞しながら、表現の特徴について理解する。(主に講義)
- II. 感想や考察したことをワークシートに記入し、互いに意見交換を行う。
- III. 抽象画の実技演習を行う。スパッターリングの技法を用いて抽象表現を行う。(作品制作：B5のワークシートに描く)

<指導上の留意点>

抽象画は現実世界の形象を取り扱わず、純然たる線・色・形と素材によって造形表現するものであることを理解させるとともに、それによって表出される形体や色彩の構成の美しさやよさを感じ取らせる。表現体験においては、バランス・リズム・動き・アクセントなどの構成の諸要素について意識させながら表現の工夫をする。

3. 教材開発と授業実践の評価

本項では、教材の有効性と授業実践の成果を評価する。生徒がこの授業によってどのような力を獲得したのか、生徒がどのように変容したのかを生徒の提出したレポート、作品、自己評価シート、教師による観察によって考察を試みる。

この授業を始めるときの生徒の反応は、「鑑賞はつまらない。描く(表現)方が楽しい」というものであった。筆者は、この授業が成功する鍵は「導入」にあると考え、スライド等の図版やビデオなどを用意して視覚的効果を工夫したプレゼンテーションを用意した。その結果、生徒の興味関心を喚起することができた((3)指導上の工夫を鑑賞を参照)。

下記の表Iは生徒のレポート、図I～VIIIは表現体験の作品である。これらを分析すると、教師側の意図した学

習のねらいがある程度反映した内容になっている。共通して評価できることは、文化事象の背景を探ることと表現体験することをとおして文化理解を深めるといったねらいが生徒の学習活動の中で進行していると認められることである。特に作家の表現意図を知ることによって作品への興味関心が高まり、作品理解が進んでいくことがある。そして、自らその表現を体験をすることによって一層理解が深まったとを記述した生徒も多くいる。しかし、どの程度理解が深まったのかは、個人差があるのも事実であり、西洋や日本の古典美術について一面的な理解にとどまり、誤解している記述もある。

もう一つのポイントとして、この学習をとおして「美術の素晴らしさを感じた」、「描くことは苦手だけど、見ること（鑑賞）が好きになった」、「時間があればもっと多様な美術鑑賞や表現体験をしたい」など、教師にとって嬉しい記述も多くある。この学習によって美術に興味を持ち、好きになったということになれば、この授業のねらいの大きな部分が達成されたことになる。つまり、この学習をとおして、生涯にわたって美術を愛好するきっかけが与えられたということである。

本研究における教材と授業展開については幾つかの問題点が指摘できる。第一は、5回の授業で取り上げた5つのテーマについて、もっと異なる視点での適切なテーマがあるのではないかと言うこと、第二は、各テーマの導入時にスライド等で図版を鑑賞するのであるが、鑑賞しながらの生徒の意見交換等に時間が充分にとれないことと、その後の生徒自身による作家研究などの探究活動の時間が確保されていないことである。このことは、教師の作品解説（講義）や生徒の発表・意見交換といった限られた情報によって一面的な作品理解に陥る危険性を内包している。

表I (生徒のレポート: 抜粋)

<テーマ1>

○ルネッサンスの人々による透視図法の発見は歴史的に大きな意味があったと思う。目に見える3次元の世界を2次元の平面の紙に置き換える手法は、後世のもの表し方の標準となったと思う。

○ルネッサンスの人は科学に目覚めたということが美術作品をとおしてもよく分かった。自然をありのままにとらえ、どうしてそうなっているのかを探究していく姿勢が科学を発展させたのだと感じた。

○目に見える世界の見え方、空間の表し方を法則化しようとしたのがすごい。

<テーマ2>

○まるで斜め上から覗き込んだように描くという「源氏物語絵巻」の手法は、様々な視点からの場面を見せてくれる

ということでは何か“お得な感じ”がした。

○日本のこの時代の美術は、源氏雲や末広がり構図などが独特で、線や色使いを単純にしたり、余白をとったりで、良さがあると思います。

○表現が整理され、伝えたいことにポイントを絞ってうまく見せている方法はすごくよくできていると感じた。

<テーマ3>

○キュビズムの手法は、一つの物事を多方面から見つめる、世界を拡張した見方ができるようになったのだと感じた。そして十人十色の個性豊かな文化が出てきたのだろう。

○キュビズムは様々な情報を一枚の絵の中に盛り込もうとしたので、あのような表現になったと思った。

○キュビズムについて習ってみて、はじめて作者が何が言いたいのが分かった。芸術は理解しがたいものも多いけれど、素晴らしいと思います。

<テーマ4>

○水墨画を体験して、白と黒の濃淡によって表情が変わってくるのが興味深かった。墨の微妙なにじみ加減なども奥深く、独特の味わいがあると感じた。

○余白を大切にすることは、日本人ならではの自然観、世界観があるのだと感じた。自然を大切に、その中で生きていこうとする思いがあるのではないかな。

<テーマ5>

○20世紀の美術は、様々な感情が渦巻く中で、対象をいかにとらえるのか、いかに表現するのかが重要視される時代だと思いました。

○抽象表現など、思うがままに描くという感じの20世紀美術は、不思議ではあるが、何かを感じさせる表現だと思った。また、個性を大切にすることが重要視される時代だ。

○美術は、目に見えるものから、目に見えないものを表現する方向に変わってきたと感じた。色や形、線や図形で心情を表現できることはとても素晴らしいことだと思う。この学習で、抽象画に対するイメージが変わりました。

<全体をとおして>

○西洋と日本の古典美術を鑑賞して、同じ人間なのにどうしてこんなにとらえ方や表現の仕方が異なるのだろうかと思った。

○何かを描き表現するとき、様々な描き方、表現の仕方があり、それによって受ける印象もどんどん変わることが鑑賞できて面白かった。また、その作品が時代、地域の世界観などを反映していることが分かりました。他にもどんな表現があるのだろうかに興味をわいてきました。

○私には、絵画というと西洋のイメージが強かったが、日本には西洋の人たちが気づけなかったものの見方、表し方が存在し、やがては互いに影響し合ったことがわかった。

○ここで勉強した作家については知っていたけれど、生きた時代の背景や手法についてはあまり知らなかった。特に勉強になったのは、実際に自分で描いてみた

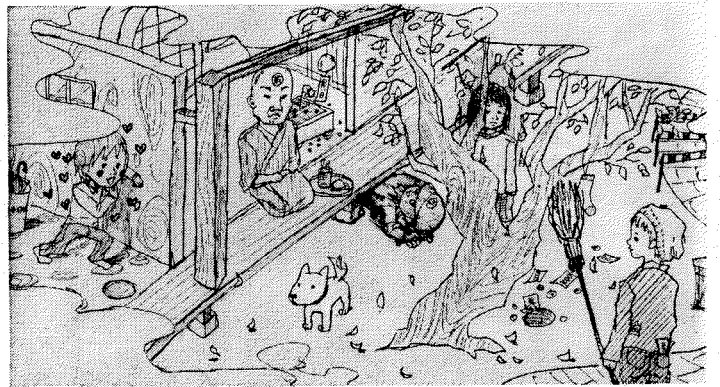
こと。色々な表現体験ができて、様々な発見があった。そして、それを自分のアイデアと合わせて描くことによって、作家たちの心情や背景を知ることができた。そして楽しかった。

○ジャポニズムなどをみると、日本の美術も西洋の美術も互いに影響しあい、発展してきたことがわかった。
○絵画は対象をそのまま写実的にとらえることだと思っていたが、実は内面を表現する方向に発展しているのだと思った。

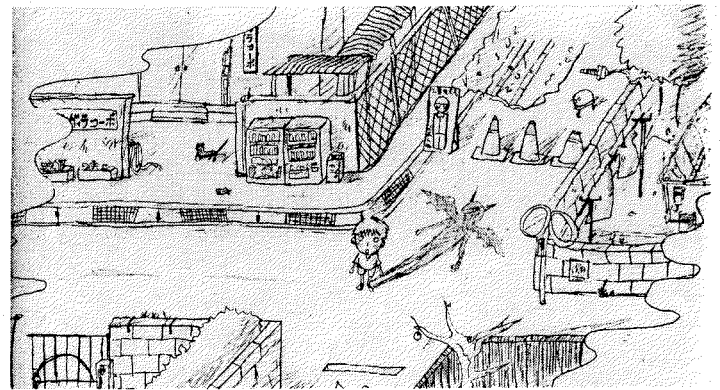
○この授業を受けて、中学校の頃より美術が好きになった。また、日本の古典美術がすこし理解できた。

○美術の歴史や絵の変容をとおして、人間のすごさとそれぞれにある独自の感性を感じることができた。美術は奥深く不思議なものであると思った。

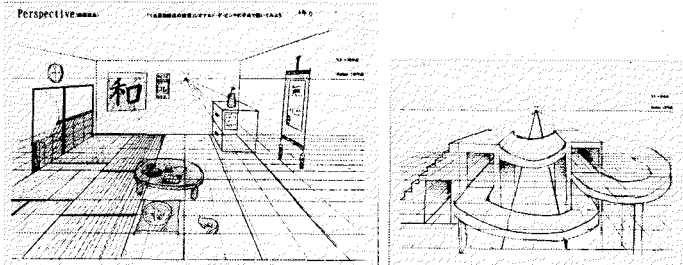
○世の中には様々な表現があり、どれも良さがある。時間があればもっと色々な方法で描いたり鑑賞したりしたい。



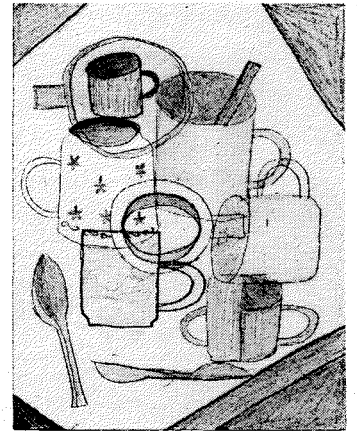
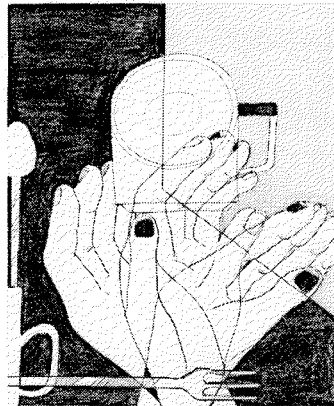
図II (生徒作品：源氏物語絵巻の手法)



図III (生徒作品：源氏物語絵巻の手法)



図I (生徒作品：パースペクティブ)



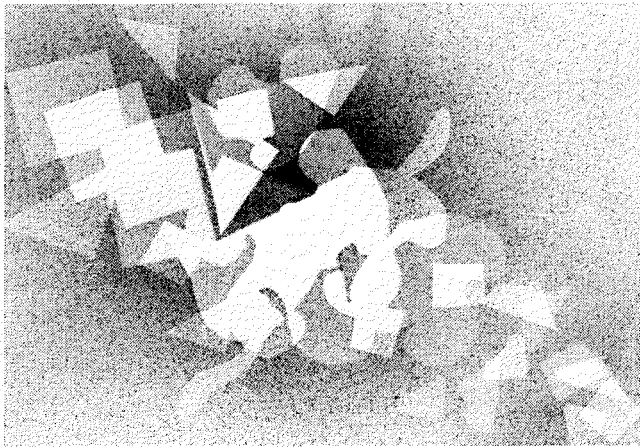
図IV (生徒作品：キュビズムの手法)



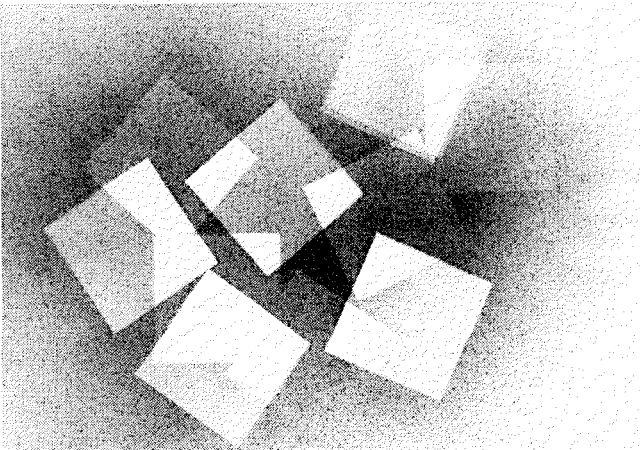
図V (生徒作品：水墨画の手法)



図VI (生徒作品：水墨画の手法)



図VII (生徒作品：抽象表現・スパッティング)



図VIII (生徒作品：抽象表現・スパッティング)

4. おわりに

筆者は昨年、メキシコの女流画家フリーダ・カーロの展覧会を紹介する記事を目にした。彼女の絵は以前、雑誌の図版で見えていたが、その印象は、奇妙な空想画、何か謎めいた絵だ、といったものであった。ところが、彼

女の評伝を読み、人生を知ったとき、初めて彼女の絵を理解できたと感じた。1930年～1940年代にメキシコで活躍したこの女流画家は、18歳で交通事故に遭って下半身不随となり、その後画家リベラとの恋愛、結婚、妊娠、流産、そして病んでいく肉体、迫る死、そうした人生の中で自画像を描き続けたのである。そうして生まれた作品には彼女の生活や心の葛藤が表現されているのであり、作品と人生は密着している。

絵画は絵画だけで自立しているもので、純粋にその作品だけを鑑賞すればよいという見解がある。これは、作品を生み出した人間や地歴的な背景などの知識によりかかることなく無垢な目で自由に鑑賞したほうがよいという考え方であるが、しかし、フリーダの作品の場合、彼女の人生を抜きにしてはその絵を理解できないだろう。このことは、同様に、19世紀以前のヨーロッパ絵画などにも言えることである。ヨーロッパ絵画の多くはキリスト教の物語や教義、歴史画である。これは日本人から見れば知識を持たないままでは理解できない異文化の作品群である。海外旅行で美術館を訪れても、色がきれい、構成が面白い、描写が素晴らしいといった表面的で感覚的な感想を抱くだけである。

ここで誤解がないように述べておくことがある。筆者は鑑賞教育のあり方として“まずは知識注入”がよいと言っているのではない。筆者は、多様なアプローチから成り、総合的な内容をもつ鑑賞教育が必要であると考える。“多様なアプローチ”とは、ある題材では、最初に子ども達に自由に鑑賞させて、発見させたり、疑問に思うことを感想に書かせたりする。その後、作家研究などをおしてその背景を探究し、鑑賞を深めていくといった展開である。もう一方では、ポイントとなる作品について、はじめにその特徴や意味、背景を学習することによって興味関心を持たせて、その後、自由に探究したり、自分の持つ知識や感性などを総合的に働かせて鑑賞を深めるといったアプローチもある。このように多様な鑑賞のきっかけを与え、興味関心を持たせることが大切である。人間の思考は、その人の持っている知識や経験の中から広がったり新たなものが生まれたりするものだからである。したがって、学校教育における鑑賞教育は、子ども達に生涯にわたって美術を愛好（鑑賞）するための礎を築かせることである。

世界がグローバル化する今日、自分たちと異なる文化への理解を深めることがますます重要になってくる。異文化への敬愛の念を抱き、相互理解を進めることが人類共生への道でもある。